

一筆入魂



私たちは能登高校書道部です

町内唯一の高校、石川県立能登高等学校の書道部「能登高書道部」。
ここでは、現在4人の部員が書道の「静」と「動」、「臨書」と「書道パフォーマンス」作品作りに取り組んでいます。
自身と向き合い、地域と共に歩む活動の日々を追いました。

「能登高校書道部です。お願いします。」

書道パフォーマンスが始まる合図です。声が聞こえるのは旧宇出津公民館の3階。ここが能登高校書道部の練習場です。

練習は毎日行われ、平日は授業後



▲「能登高校」と彫られた手作りの学校印

に学校から徒歩で移動し行います。3年生が引退した現在、部員は4人。2年生1人、1年生3人で活動しています。

活動は、心静かに筆を走らせ書道の基本を鍛錬する「臨書」と、音楽などに合わせ、体全体を使って大きな紙に特大筆で文字を書く「書道パフォーマンス」の2本柱です。活動スケジュールに合わせ筆や紙を変えて練習し、作品を制作しています。

町内で開催される様々なイベントなどに出演し、ダイナミックなステージで観客を魅了する「書道パフォーマンス」。本格的に始めたのは平成26年からです。「能登高祭」で行った書道セレモニーを見て感動した、熱い思いを持った生徒らが入部したことが後押ししました。



▲刷毛、ローラー、スプレーなど様々な道具を駆使して作品を彩る

パフォーマンスの実力を試すべく目指したステージは「書道パフォーマンス甲子園」です。書道パフォーマンスに青春をかける全国の高校生が技を競い頂点を決めるこの大会。思いを胸に取組み始めてから2年、徐々に力を備え、周囲の応援もあり平成28年に初めて参加。現在も挑戦を続けています。

○書道パフォーマンス甲子園

大会は演技動画・作品写真審査による予選と、予選を通過した学校の演技審査による本選で構成されており、本選は愛媛県で開催。今年の第11回大会には全116校が参加し、県内では小松市立高校、日本航空高校石川が参加。過去、県勢の本選出場は無し。

今年の主な出展・パフォーマンス

○…書道パフォーマンス ●…臨書 ※予定を含む

5月 ○猿鬼歩こう走ろう健康大会

○書道パフォーマンス甲子園



イカす会

○能登小本港イカす会



○能登高校体験入学

●石川県高等学校総合文化祭

○ござれ祭り



○第4回すず里山里映画祭

○能登高祭



○秋の味覚と

「能登牛」肉まつりin能登町

●能登地区高校美術展

○いしかわジュニア

アートステージ2018

1月 ○宇出津港のと寒ぶりまつり

仲間と描く美の世界

真っ白な、巨大なキャンバスに戸惑うこと無く筆を下ろせるのは、積み上げた練習の証。一ヶ月、作品によってはそれ以上の時間をかけて作り上げ本番に望みます。



本番 出演「秋の味覚市と『能登牛』肉まつり」

練習の成果を存分に発揮！何が描き出されるか、観客が固唾をのんで見守ります。

全員でテーブルを囲んで



その一 振り返り、図案作成

前回のパフォーマンス、能登高祭での内容を振り返る。良かった点、悪かった点を踏まえ「秋の味覚市」の図案作成へ。考え、意見を出し合いゼロから。文字やイラスト、レイアウトをスケッチ。

先生は答えを教えるのではなく考えを促し出させる



その三 美しさ、楽しさの追求

決まった図案の完成度を上げる。観客を引きつける「飛び道具」を考えたり、描く時の一人ひとりの動きをイメージして問題無く書き上げられるか確認。どうするとさらに良くなるか、個々の思いや感覚がぶつかり合う。

代々引き継ぐ衣装



その四 衣装・曲決め

作品やイベントに合う衣装、パフォーマンスに合わせて流す曲を決める。農業や畜産業から連想しつなぎに。音楽はダンスに合わせやすく会場が盛り上がる曲かがポイント。

紙は無駄なく。以前に使った紙を切って裏面を活用



その二 図案を縮小版で再現

本番の4分の1のサイズ(縦2¹/₂、横3¹/₂)の紙に図案を描き、色合いや文字サイズのバランスなどおおよその仕上がりを見る。複数の図案の中から何パターンか描いて比較し一つに絞り込む。スケッチでは気づきにくい部分を確認できる大切な行程。

最初はゆっくりと



その五 文字・ダンス練習

全員で話し合い文字やイラスト書く担当を決め、各自新聞紙などに書いて練習。ダンスは全員で、振り付けを一つ一つ確認しながら覚えていく。

指で文字を書いてイメージ



その六 通し練習

本番と同じサイズの練習用の紙を用意。始めから最後まで曲に合わせて行う。練習とはいえ、一枚の紙に描くことができるのは一回のみ。道具を使わず、動きだけの確認を納得いくまで繰り返した後、実際に筆を使って描いた。

翌日に備え準備は余念なく



その七 会場リハーサル

大きくて運ぶことが難しい紙は現地で作られる。パフォーマンス中に持ち替える筆や刷毛などの道具が使いやすい場所にあるか、色合いが屋外でも問題がないかなど、実際に会場を書いて確認。

伝えたいものがある

数下 笑梨



一人でも多くの人に見てもらいたいという思いで、呼んでいただいた町内のイベント、県主催のキャンペーンや各種文化イベントなど様々な場所で活動しています。

観客に若者の活力を与え、都市部の学生でなくても頑張っている様子が伝わるような躍動感あるパフォーマンスを目指し日々の練習に取り組んでいます。

私たちの可能性

中谷 幸奈



「全然いつもと違ってかっこいい」と、パフォーマンスを見たクラスメートから言われ嬉しかったです。

元々、大勢の人前に出て何かをするのは得意ではなかったけれど、このメンバーと一緒にいると本番でも落ち着いてパフォーマンスができます。自分の可能性に気づき、作品を通して新たな一面を表現できるのも書道パフォーマンスの魅力です。

みんなの思いをのせて

田岸 真央



書道パフォーマンスを作り上げる時に大切にしていることは、みんなの意見に反対せず、まず受け入れること。一人ひとりの思いや個性があふれる作品にしたいと思っています。

書道は始めたばかりで道半ば。「書道はこんな感じかな」と文字を書くポイントは分かってきたけれど、自分を作品で表現する力はまだまだ足りないので頑張っていきたいです。

目指すは日本一のパフォーマンス 県勢初の本戦出場に向け駆ける

能登高校書道部部長 田岸 和真さん

■部長になり一ヶ月。伝統を引き継ぐ意気込みを聞きました

「パフォーマンスの後に感じる達成感とは本当にすごい。やっている時も楽しいけれど、自分達を書いたものが掲げられ、見たときにすごく達成感がこみ上げる」と笑顔で話すのは部長を努める田岸和

真さん。

書道部へ入ったきっかけは、陸上部に所属していた1年生の時に書道部員からパフォーマンスの助っ人として誘われて参加したこと。「またやりたいな」と楽しさに魅了され書道部に入りました。

文字やデザイン、ダンスなど全てを部員で相談しながら作っていくます。意見を出し合い創作できる楽しさがある反面、考えることも多くなかなか決まらない大変さがあると言います。

部員の少なさも課題です。「あと2、3人いると演出の幅が広がり、スムーズになるのに」と感じることもあるそうです。そんな中、日々心がけていることは、全ての環境を楽しむこと。「見



▲助っ人で初めて参加した書道パフォーマンスが成功し、笑顔で写る田岸さん(平成29年10月・能登町民大運動会)



に来た人を楽しませるパフォーマンスをしたいときは、まず、自分たちが楽しめないといけない人も楽しくないと思う」と理由を明かします。

書道を始めてからは字を書くことへの意識が強くなり、日常生活にも変化が生まれました。先生に何度注意されてもなかなか直らない字のクセがあったことから、部活中だけでなく、授業などでその字を書くときも意識して書くようにし、美しい字への鍛錬を怠りません。

「書道パフォーマンス甲子園に行きたい。見に行くだけでも刺激になるし、でもやっぱり、選手として行きたい」と大会への思いを熱く語った田岸さん。石川県初となる本選出場を目標に部員一丸となり練習に励みます。

真の愛は「忍耐」のこころ 生徒の豊かな個性を引き出したい

能登高校書道部顧問 府坡 美智子先生

■指導に携わり8年。大切にしていることを聞きました

生徒一人ひとりが作品に対して、思いやこだわりを持って「待つ姿勢」です。焦らせないで生徒がじっくりと考える時間を与え、生徒と話をしたり、様子を見守ったりします。時折、「今のはどういう

意味かな」「もう少し詳しく説明して欲しい」などと問いかけて、生徒同士の意思疎通を促します。「作品をダイナミックにしたい」というときにもどうしたいのか問いかけ、方向性を具体化するのが私の役割です。うまく表現ができなかったり、考えを自分の言葉で伝えるのが苦手だったりする生徒もいますが、じっくり見守っていると、その感性の豊かさに驚かされることがあります。

書道を通じて生徒に伝えたいことは、「自分を認めること」と、「努力を惜しまないこと」です。生徒が「上手になったね」と褒められたときに「そんなことないです」と謙遜してしまうと、「一生懸命やっている自分のやる気が半減してしまいます。字がうまくなるためには、褒め



▲「秋の味覚市」のスケッチ

られたら遠慮せずに、自分を認めてあげるのが上達の近道だと考えています。

作品作りの過程では、積みあがったものを大きく崩すことも往々にしてあり、むなしさを覚えることも少なくありません。崩すことを無駄とは思わず、重ねた努力があるからこそ、今までの自分とは違う誇らしいものが見えます。このことを実践してほしいと思います。

多くの地域の方と接する様々なイベントに呼んでいただいています。発表の場があるからこそ、力をつけることができます。パフォーマンスの会場が金沢などの遠方になることがあります。朝早くから生徒と共に道具運び保護者も会場に足を運んでくれます。部の活動は、地域や保護者の皆様の理解や協力によって支えられています。感謝しています。

書道の基本「臨書」

心静かに 「道」を極める



「臨書」は書道の「基礎」「基本」。書道では手本となる臨書作品があり、それを忠実に書いていく。忠実に書き写すなかで、作者がどんな生き方をしてきたのか、作者の人となりを讀んだり感じたりし、臨書作品でありながらも自分の個性が表現された一枚が生み出されます。

書道パフォーマンスとは異なり、自分自身の戦いとなる臨書。部で参加する大会は年2回。県内一位を目指す「石川県高等学校総合文化祭」、新人戦とも言われ全国大会に繋がる「能登地区高校美術展」に参加し練習の成果を試します。

自分が書いたものを確認。先生から手ほどきを受ける▼



▲旧宇出津公民館3階。より一層の緊張感が漂う臨書の練習

直面した壁、今ある課題

筆に力を、共に筆を

書道パフォーマンスで使う物は全てが大きい。

ロール状のものをつなぎ合わせて作るパフォーマンスの紙は縦4呎、横6呎、半紙の約300倍の大きさで、人が乗って力を込めて書いても耐えられる厚みのある専用の紙です。貴重なため、本番と直前の練習に限り使います。当然、筆も大きく、通常使う「特

大筆」は長さが約70センチ、筆の一番太い「ダルマ」部分は直径が約15センチ、重さも約3キログラムあります。特大筆は4

本ありますが、日々の練習で毛が抜け落ち、筆としての状態を保っているのは1本のみになっています。筆は1本10万から高いものでは20万円と高価ですが、2、3年で限界を迎え、また、練習用と本番用とで使い分けができないのが悩みです。



◀毛先も割れて傷んではいらぬものの、丁寧に手入れし大切に使われている



◀みんなの心を一つに。パフォーマンスの前に必ず行う「儀式」



▲「習字部」ではなく「書道部」。熱い思いのこもった文字

また、大きな作品には多くの描き手が必要。

部員の確保も課題です。観客を楽しませる色彩豊かな作品作りや、書道パフォーマンス甲子園への挑戦を考えると7人以上の部員が必要になります。「助っ人参加も歓迎します」部員らは仲間を募り呼びかけます。

学校、「能登高校を応援する会」の支援のもとより、町民からの応援が何よりの力となっています。

集まる「視線」、寄せる「期待」

「この前見に行ったよ。頑張らね」。活動が注目され、書道パフォーマンスの会場だけでなく、日々の生活の中でも声を掛けられることがあることを部員らは喜びます。

県内のテレビ番組にも取り上げられました。取材スタッフは、学年関係無くアイデアを出し合い作りあげる姿や、部員が少ないながらもダイナミックなパフォーマンスを披露する様子を紹介したいと話し、熱心に部員の姿や活動の様子を撮影しました。



見てくれる「人」、支えてくれる「地域」無しに作品は完成しません。
あなたと共に創る一枚
これまでも、これからも

